



kaminorippo.org

付録8b: いけにえ — なぜ今日それを守ることができないのか

このページは、エルサレムに神殿が存在していた時にのみ守ることが可能であった神の律法を探究するシリーズの一部です。

- [付録8a: 神殿を必要とする神の律法](#)
- [付録8b: いけにえ — なぜ今日それを守ることができないのか](#) (現在のページ)。
- [付録8c: 聖書の祭り — なぜ今日そのいずれも守ることができないのか](#)
- [付録8d: 清めの律法 — なぜ神殿なしでは守ることができないのか](#)
- [付録8e: 十分の一と初物 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8f: 聖餐 — イエスの最後の晩餐は過越であった](#)
- [付録8g: ナジル人と誓願の律法 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8h: 神殿に関わる部分的・象徴的な服従](#)
- [付録8i: 十字架と神殿](#)

律法が実際に要求していたこと

イスラエルに与えられたすべての戒めの中で、いけにえほど詳細に定められていたものはありません。神はあらゆる点を明確にされました。動物の種類、年齢、状態、血の扱い方、祭壇の場所、祭司の役割、さらには奉仕の際に着用する衣服に至るまでです。全焼のいけにえ、罪のいけにえ、賠償のいけにえ、交わりのいけにえ、日々のささげ物——そのすべては、個人的な創意や別解釈の余地を一切残さない、神による型に従って行われました。「祭司はこうしなければならない……祭壇はここにあり……血はそこに注がれる……」。神の律法は、適応可能な提案ではなく、正確な服従の体系なのです。

いけにえは、単に「神のために動物を殺すこと」では決してありませんでした。それは、神殿の庭においてのみ(レビ記 17:3-5; 申命記 12:5-6; 申命記 12:11-14)、アロンの系統に属する聖別された祭司によってのみ(出エジプト記 28:1; 出エジプト記 29:9; レビ記 1:5; 民数記 18:7)、そして儀礼的清さの条件の下でのみ行われる聖なる行為でした(レビ記 7:19-21; レビ記 22:2-6)。礼拝者が場所を選ぶことはありませんでした。礼拝者が執行者を選ぶこともありませんでした。血の扱い方や注ぐ場所を決めることもありませんでした。この

体系全体が神の設計であり、服従とはその設計のすべての詳細を尊重することを意味していました（出エジプト記 25:40；出エジプト記 26:30；レビ記 10:1-3；申命記 12:32）。

過去にイスラエルがどのようにこれらの戒めに従っていたか

神殿が存在していた時、イスラエルはこれらの律法を命じられたとおりに正確に守っていました。モーセ、ヨシュア、サムエル、ソロモン、ヒゼキヤ、ヨシヤ、エズラ、ネヘミヤの世代は皆、神ご自身が定められたいけにえを通して神に近づいていました。誰一人として祭壇を置き換えることはありませんでした。新しい儀式を即興で作り出す者もいませんでした。自宅や地方の集まりでいけにえを献げる者もいませんでした。王であっても、その権威にかかわらず、祭司にのみ許された務めを行うことは禁じられていました。

聖書は繰り返し示しています。イスラエルがこの体系を変えようとしたとき——認められていない場所でいけにえを献げたり、祭司でない者に聖なる務めを担わせたりしたとき——神はその礼拝を退け、しばしば裁きをもたらされました（サムエル記第一 13:8-14；歴代誌第二 26:16-21）。忠実さとは、神が語られたとおりに、神が選ばれた場所で、神が任命された僕たちを通して行うことでした。

なぜこれらの戒めは今日守ることができないのか

西暦70年にローマ人によって神殿が破壊された後、いけにえの体系全体は実行不可能となりました。それは神がそれを廃したからではなく、これらの戒めに従うために神ご自身が与えられた構造が、もはや存在しないからです。神殿も、祭壇も、至聖所も、聖別された祭司職も、確立された清めの体系も、地上でいけにえの血を神の御前に携えることのできる公認された場所も存在しません。

これらの要素がない以上、「最善を尽くす」とか「律法の精神を守る」といった概念は成り立ちません。服従には、神が定められた条件が必要です。その条件が取り除かれたとき、服従は不可能になります。それは、私たちが従おうとしないからではなく、神ご自身がこれら特定の戒めを果たすための手段を取り除かれたからです。

ダニエルがいけにえの停止について預言したこと

聖書そのものが、いけにえが止むことを予告していました。それは神がそれを廃したからではなく、神殿が破壊されるからです。ダニエルは「いけにえと供え物がやむ」と記しましたが（ダニエル書 9:27）、その理由も明らかにしています。都と聖所が敵対する勢力によって滅ぼされるということです（ダニエル書 9:26）。さらにダニエル書 12:11 では、日々のいけにえが「取り除かれる」と述べられていますが、これは律法の取消しではなく、暴力と荒廃による除去を示す表現です。ダニエル書のどこにも、神がご自身の戒めを変更されたという示唆はありません。いけにえが止んだのは、神殿が荒廃させられたからであり、預言者が語ったとおりでした。これは、律法そのものが損なわれていないこと、ただ神が服従のために選ばれた場所が取り除かれたことを確認するものです。

象徴的、または作り出された犠牲という誤り

多くのメシア派グループは、いけにえの体系の一部を象徴的に再現しようとします。過越の食事を行い、それを「いけにえ」と呼びます。集会で香を焚きます。儀式を再現し、供え物を振り、演出を通して「トラーを尊んでいる」と装います。ある者たちは、「預言的ないけにえ」「霊的ないけにえ」「将来の神殿のためのリハーサル」といった教えさえ作り出します。これらは宗教的に感じられるかもしれませんが、服従ではありません。発明にすぎないのです。

神は、象徴的ないけにえを求められたことはありません。人間の想像力によって作られた代用品を受け入れられたことはありません。そして、神殿の外で行うことを、神殿の内でのみ行うよう命じられた戒めに対して、神が栄誉を受けられることはありません。神殿なしにこれらの戒めを模倣することは、忠実さではなく、神がそれらを定められた際に用いられた正確さそのものを無視する行為です。

いけにえは、神ご自身が回復される神殿を待っている

いけにえの体系は消え去ったのでも、廃止されたのでも、人間が考案した象徴的行為や霊的比喩に置き換えられたのでもありません。律法、預言者、あるいはイエスの言葉の中に、いけにえに関する戒めが終わったと宣言するものは一つもありません。イエスは、律法のあらゆる部分の永遠の有効性を確認し、天と地が過ぎ去るまでは、文字の最も小さな一画でさえ失われないと語られました(マタイ 5:17-18)。天と地は今も存在しています。ゆえに、戒めも存在しています。

旧約聖書全体を通して、神はアロンの祭司職との契約が「永遠」であると繰り返し約束されました(出エジプト記 29:9; 民数記 25:13)。律法はいけにえの規定を「代々にわたる永遠の掟」と呼んでいます(例えば、レビ記 16:34; レビ記 23:14; レビ記 23:21; レビ記 23:31; レビ記 23:41)。これらの戒めの終わりを告げた預言者は一人もいません。それどころか、預言者たちは、諸国の民がイスラエルの神を尊び、神の家が「すべての民の祈りの家」となる未来を語っています(イザヤ書 56:7)。これは、イエスが神殿の聖さを擁護するために引用された同じ聖句です(マルコ 11:17)。イエスは、この聖句を神殿の終わりを示すために引用されたのではなく、それを汚していた者たちを責めるために引用されました。

律法がこれらのいけにえを廃しておらず、イエスもそれらを廃しておらず、預言者たちもその取消しを教えていない以上、私たちは聖書が許す結論だけにとどまります。すなわち、これらの戒めは神の永遠の律法の一部として今も存続しており、ただ神ご自身が要求された要素——神殿、祭司職、祭壇、清めの体系——が存在しないために、今日守ることができないのです。

神ご自身が取り除かれたものを回復されるその時まで、正しい姿勢は謙遜です——模倣ではありません。私たちは、神が停止されたものを再現しようとはしません。祭壇を動かしたり、場所を変えたり、儀式を改変したり、象徴的な代替物を発明したりはしません。私たちは律法を認め、その完全さを尊び、神が命じられたことに付け加えも削除もしないことを選びます(申命記 4:2)。それ以下のものは部分的な服従であり、部分的な服従は不服従です。